

「幸福」の定義はたくさんある。わが国では幸田露伴の「幸福論」西洋ではスイスのカール・ヒルティの「幸福論」が人口に膾炙かいしやされているが、ここでは、中国の古典の知恵に学んでみたいと思う。

これは、それほど古いものではないが、明の時代みん（今から四百年位前）に「洪応明」こうおうめい字を「洪自誠」あざなという人が「菜根譚」さいこんたんという書物を残している。この書は短い警句集なのだが、それぞれの章句に含蓄がんちくがあつて面白く読めて納得させられる。原文はくどくなるので省略するが、一文だけ翻訳し紹介すると、次のような片言へんげんが入っている。

「何が幸せかといって、平穩無事より幸せなことはなく、何が幸かといって、欲求過多より不幸なことではない。しかし、あくせく苦勞してこそ、はじめて平穩無事の幸せなことがわかり、心落ち着けてこそ、はじめて欲求過多の不幸なことが理解できるのである」と云うのがある。だが、真の幸せに気づくためには、目には見えない「幸せ」を掴むために一所懸命に励む経験を持たなければならない。といっているのである。一般論としては禅宗の云う「吾唯知足」で事足れりとし、この真意を知ったつもりになっているが、修行を何

年も続けた僧以外には、なかなか知ることの出来ない厚みのある意味がある。確かに、誰もが平穩無事の幸せを願うこの言葉を素直に肯定するに違いはない。だが、その肯定の根拠はいったい何処から来るのであろうか。言わずもがな、平穩無事で無かった時との比較から来るのである。しかも、洪自誠は苦勞の多かった人ほど「幸せ」の味が解ると云うのである。「荀子」ではないが、人間とは本来が愚人として生まれ思考を深めないで生き続けると欲望のかたまりとなり、慈しみの心を持たない生き方しか出来ないと断じている。拡大して捉えれば、人間は無いものねだりをする性質をもっている。ので、もっと大きな別の幸せがあるのではないか、あるいは、現在の幸せを突然失うのではないかと、疑心暗鬼で自らの幸せを自ら減じているというのである。この言葉には万人が納得せざるを得ない説得力がある。確かに、空腹時は一椀のご飯、一個のおにぎりが幸せの対象であり、それが満たされると、もっと美味しいもの、さらに、着衣、住まいと要求度は上がり続け、億単位のお金を持っても満足できなくなる。それが人間の特性だという人も居るかも知れないが、最低限の衣、食、住は必要だとしても、それ以上の「ものを敢えて望んだ時から欲望は際限なく広がる。そして、やがて

は外部から嫉みや妬みが始まり心穏やかには暮らせなくなる。でも、私は菜根譚には書かれていないが、もう一つ、比較や嵩かさや量とはまったく異なった次元の「自分自身の言動」と言うものを加えたい。

日常生活の中で何気なく使っている言葉の中にそれは潜んでいる。言葉それ自体は人と人との潤滑油としてなくてはならないものであることは言うまでもない。ところが、時に言葉自身が意思を持ったかのように誤解という厄介なものを生み出すことがあるのである。誰でもが経験しているであろう励ましや善意の言葉が逆の意味で伝わることがあるのだ。誤解や齟齬そごがそれである。第三者を通じてそれが耳に入ると心穏やかではいられない。それまで充たされていた幸福感は一気に消え去る。

日本では昔からことばを言霊ことだまと云い、「ことば」には霊力があると信じられてきた。それはある意味では今日の世界でも生きている。これは人の好き嫌いの原初はどこから来るのかを考えると解り易い。初対面の人を含め、容貌の美醜や癖などでは決してない。会話が楽しいか否かで決まるのである。たとえば、会話の弾む人とは、一度相手の言葉を肯定し、次にやんわりと自分の考えを語る。これとは逆に受けた言葉をすぐさま否定してから始まる人もいる。どちらが

相手に不愉快さをもたらすか説明の必要はあるまい。これは他人ごとではなく、不用意に自分も言っているかも知れないので、要注意である。相手を不愉快にすることは、友を少なくすることであり、幸せを逃がすことに等しいことなのである。

そこで、天は人間に、もう一つ、自制という理性も与えている。自己の欲望を制御し、多くの人々と喜びを分かち合える内面的な喜び、これこそ日本人が永年ぶれずに持っていた「結い」であつたり、「向う三軒両隣り」の相互扶助の精神であつた。現代は時代の流れとは云え、資本主義が跋扈し、かつての、「心が物よりも価値があり、これを美德とする」精神が薄れてきたように思えてならない。

私には時々頭の中をよぎる一文がある。それは書籍上で道を求める学者の論理ではなく、兼好法師の「よき細工は、少し鈍き刀にぶのみを使う・・・」というくだりである。これは人間が考え出した至高の知恵ではないかと考えるからである。「過ぎたるは猶及なほばざるが如し」を改めてかみしめているところである。

そこで私の「幸福」の結論。過剰な期待はしない。しかし、必要以上に失望もしない。幸福とは自分が「幸」とか「不幸」とかを意識しないでいる時が、もっとも幸福な時である」となるのである。